



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	父親の学びをつくる行政と住民学習組織の協同 : 「両親教室」における学習主体と教育主体の循環に注目して
Author(s)	吉岡, 亜希子
Citation	社会教育研究, 34, 91-100
Issue Date	2016-06-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62303
Type	departmental bulletin paper
File Information	91_yoshioka.pdf



父親の学びをつくる行政と住民学習組織の協同 ―「両親教室」における学習主体と教育主体の循環に注目して―

吉 岡 亜希子*

目 次

1. はじめに	91
2. 「両親教室（父親教室）」の学びに関わる研究と実践的課題	92
3. 「両親教室（父親教室）」の概要	93
4. 住民学習組織との協同	95
5. まとめ	98

1. はじめに

本稿は、妊娠5～7か月の初妊婦とその夫を対象に実施されている「両親教室」における父親の学び創りに注目して報告する。特に父親の学び創りに関する行政と住民学習組織の協同に焦点化してその学習内容と成立条件についてみていく。

妊婦とその夫を対象とした「両親教室」は、自治体の保健福祉部局主催で実施されていることが多い。教育委員会でも家庭教育支援として親の学びづくりを行っているが、本稿では、保健福祉部局で行われている「両親教室」における学びを父親の社会教育という側面から検討したい。家庭環境の多様化や地域社会の変化により家庭教育が困難な社会となっている中ⁱ、乳幼児期の子育て家庭を対象とした支援には、教育委員会と母子保健・児童福祉の担当部局が連携し、子育て家庭に多様な学習機会を提供することが求められているⁱⁱ。だが、現状では必ずしも有機的な連携が行われていない自治体が多い。本稿で取り上げる札幌市においても行政が実施する学習機会提供事業は啓発事業として行われているものが多く、必ずしも企画・準備段階において学習機会であることを十分に意識されているとは言い難い。さらに保健福祉局や子ども未来局は子育てに関わる学習機会を多く提供しているが、多様な課題に対応するためには、学習を提供する側として市民の育成が急務であるという認識が示されており、地域住民との協同による新たな仕組みづくりの模索が続いているⁱⁱⁱ。

* 父親ネットワーク北海道／北海学園大学非常勤

今回取り上げる「両親教室」の事例は、現場の職員の問題意識から立ち上がってきた学習内容を住民学習組織と連携しながら展開した実践である。試行的段階ではあるが、地域との協同による父親の学びの循環という点で示唆に富む実践であるため、その展開過程を記していく。

親の学びは子どもの年齢によって大きく異なる。本稿では、子育てのスタート地点である出産前後や乳幼児期の父親の子育て課題と求められる学びについて学習主体と教育主体の循環に着目しながらみていきたい。乳幼児の世話をする経験が乏しい、あるいはまったく無い状態で親となるケースが多い現代社会において、母親だけでなく父親も子育ての担い手として“ケア”の力量を高めることが期待されている。また、社会の変化に伴って現れている“母親一人の孤独な子育て”の問題から、家族としての協力関係の構築、相互理解も父親に求められている。加えて、地域の子育て力の低下が深刻化しており、地域で支え合う子育て文化をいかにして現代的に生み出していくかが大きな課題となっている。札幌市における市民の健康づくり指針「健康さぽろ21（第二次）」の中でも「安心して育児ができる母親を増やす」ことが取り組み方針として示され、行政が取り組むこととして「父親も含めた家族での育児の重要性について普及啓発する」ことが謳われている^{iv}。以上のような現代的な子育て課題から父親の子育てに関わる学びをみていくと、①育児の技術伝達（ケアの方法）、②夫婦の協力、相互理解といった父親の子育て意識の醸成、③地域の子育て力の向上につながる子育て文化の創造・継承（父親も含めた）の3つが喫緊に取り組まなければならない学習内容といえるだろう。

次に方法である。社会教育の領域では親が学びによって学習主体から教育主体へと変容することが明らかにされている。父親の子育てに関わる学びにおいても先輩親から若手の親へとその経験を伝える話し合い学習や子育て協同活動によって客体だった父親が地域の子育て文化を担う教育主体へと変化することが分かっている。母子保健の領域においてもこうした社会教育の研究蓄積を活用すべきと考えられるが、十分に取り入れられているとは言い難い。

さらに近年の厳しい財政事情から行政が行う親の学びに関する取り組みは、縮小や外部委託、場合によっては廃止となっているケースも少なくない。しかし、子育てに関わる課題は多様化、深刻化しており、父親の子育てへの参画やそのための学習は欠かせない。こうした課題を乗り越えるために、いま求められているのが行政と地域住民の協同である。行政だけでは担いきれない支援や学習づくりを、どのような協同のもとに成立させることができるのだろうか。

2. 「両親教室（父親教室）」の学びに関わる研究と実践的課題

行政が行う父親の学習機会には、教育委員会で行う家庭教育支援事業と母子保健の領域で行う子育て支援事業があることは先述の通りである。家庭教育支援事業に関しては、斎藤が父親教室の公的プログラムを検討している^v。公的サービスを民間に移譲する方向が進行しており、家庭教育も

それを適用する動きが進み、「父親教室」自体が廃止になるケースもみられるという。だが、実態としてニーズの有無や効果の検証が十分なされないまま実施を取りやめていると指摘する。他にも父親講座に参加する人の子育て行動の変化、参加のきっかけ、参加による日常生活への還元、NPO が企業に出向いて開かれた講座の効果などの研究もみられるが^{iv}、行政が行う「両親教室」の父親の学習内容に関わる地域との協同のあり方に焦点化した研究は見当たらない。

父親の学習内容と意識変容に関連した研究として、筆者が実践者として関わっている民間団体による「父親教室」の実践分析がある。父親の子育て意識に関わる変容には、話し合い学習という方法と多世代の参加者、父親だけでなく子育て経験のある母親の参加が有効であることがわかっている^v。さらに、「おやじの会」といった子育てグループ活動における父親の意識変容やまちぐるみの「地域子育て協同実践」に関わる父親たちが学習主体から教育主体へと変容する条件も明らかにしてきた^{vi}。だが、子育てのスタート地点である出産前後の父親の学び、特に行政が行う学習活動の内容と方法については検討してこなかった。

父親の学習活動を実践的課題からみていくと、生涯学習社会の到来と言われて久しい現代において、自治体で行う学習機会を生涯にわたる学びとしてトータルにとらえる視点が弱く、縦割りで考えられてきたことが挙げられる。つまり学習主体の側である父親が親として学ぶということをひとつづきのものとして捉えていく必要があるのではないか。

例えば、親を学習主体として位置付け、地域全体の学習を再構成していく視点については、恵庭市の実践的なアプローチが参考になるだろう。2012 年から 2014 年に取り組まれた、恵庭市の「親力つむぎ事業」では、教育委員会と保健センター、幼稚園、子育て支援センター、小中学校などで行っている親の学びを従来型の縦割りでなく、あくまでも市内で子育てをする親の視点で捉え直し、ひとつづきの学びとして展開図にまとめ配布する取り組みを実現させている^{ix}。行政や地域住民が行う学習活動は、実施する側から見る視点と実際に親として学ぶ側から見る視点は大きく異なる。ここに着目することで、学習主体の側に立った学習内容を地域全体でトータルに見通せる視点が獲得できる。学習する側は、切れ目のない子育てという営みに適した学習機会を求めるのであって、行政の担当部局が異なることで学びが分断されることは改善していかなければならないテーマである。

3. 「両親教室（父親教室）」の概要

今回事例として取り上げる札幌市では市内 10 区にそれぞれ保健センターがあり、「両親教室（父親教室）」を開催している。10 区は同じ内容ではなく、それぞれの区で企画を考え実施している。10 区の内 8 区で「両親教室」、2 区で「父親教室」という名称を使用している（内容については 表 1 を参照）。本報告は筆者が行政との協同実践の当事者（住民学習組織実践者）として関わった内容を中心に、区の担当者、講話を担当した父親の聞き取り調査からまとめたものである。

表1 札幌市の「両親教室」「父親教室」の実施状況（2016年3月現在、各区ホームページより引用）

区名	講座の名称	開催回数	内 容	備 考
中央	両親教室	4回/年	講話「先輩パパからのメッセージ」 育児実習（沐浴、着替え、抱っこ） 妊娠疑似体験（妊婦ジャケット）	
豊平	両親教室	4回/年	育児実習 妊婦体験	
北	父親教室	4回/年	沐浴、着替え、 妊娠疑似体験	
東	両親教室	4回/年	妊婦ジャケット 沐浴 講話	
白石	両親教室	4回/年	沐浴 妊婦ジャケット	
厚別	両親教室	4回/年	先輩パパの体験談 育児の実習	体験談の担当者は厚別区の職員。乳幼児のいる父親か子育て経験のある父親2名に前年度から依頼。翌年一人2回ずつ担当。2012年度には実施していたが、それ以前については資料がなく不明。
清田	両親教室	4回/年	育児実習 妊婦ジャケット スモークライザー体験	
南	両親教室	4回/年	育児実習1「赤ちゃん抱っこレッスン」 DVD視聴「赤ちゃんが泣きやまない」 「沐浴」 お風呂の入れ方 妊婦ジャケット	
手稲	両親教室	4回/年	育児実習 妊婦体験実習	
西	父親教室	4回/年	体験実習 講話「先輩パパからのメッセージ」	お父さんの支援をしていきたいという職員の声から始まる。保健センター、区職員で子育て経験者に依頼。

札幌市の「両親教室」は、2000年8月に示された「札幌市母子保健指針」がその始まりで、母親教室等の充実に向けた方向が打ち出された。当時、出産前後の沐浴指導等の親教育は主に産院で行われていた。しかし、核家族化の進展や孤独な子育ての問題が明らかになり、親同士のつながりや父親の子育てが求められるようになる。そのため、医療機関で行っていた子どものケア技術の習得に加え、親自身が住んでいる地域の人的交流、つまりその地域に住んでいるお父さん同士の交流や地域の人とのつながりづくりの場として各区の両親教室の開催が目指された。こうして産院とは異なる独自の意義づけを行った「両親教室」が推進されていくことになる。2001～2003年にプロジェクトチームがつくられ、以上のような内容が検討された。ここで重要なのは、医療機関の親教育とは異なり、子どものケア技術の習得に加え、地域の人と人を結ぶことが各区の保健センターで実施する「両親教室」の大きなねらいであり要であるとされたことにある。

2016年3月現在、各区のホームページでは10区の内、厚別区、西区、中央区の3区で子育て経

験のある父親の体験談を語るプログラムが実施されていた。3つの内、厚別区と西区は、区の男性職員が講話担当者となっている。厚別区と西区は数年前から実施しているが正確な開始年度は不明、中央区は2015年度のみの実施となっている。3区とも保健センター職員の問題意識から父親の経験談を語る学習を企画し実施につながっていったという。いずれも保健センターを利用する母親への関わりの中から、子どものケア技術を学ぶ育児実習だけでなく、父親の子育て意識に関わる学びの場の必要性を感じ実施へとつながったという。とはいえ、経験談を語る父親を毎回外部から選定し依頼することは容易ではない。財政事情が厳しい中では、予算化の必要がない区の職員の中で対応することも一つの手段であろう。だが、札幌市の場合、多くの父親が民間企業に勤め、共働き家庭の増加など労働環境の変化もある中、参加する父親の職業や課題にも目を配った人選の工夫も必要だろう。

本稿で取り上げる2015年度に実施された中央区の「両親教室」は、「札幌市母子保健指針」で打ち出された父親同士の交流や地域の人とのつながりづくりという当初のねらいを成立させるためのヒントを与えてくれる取り組みといえる。地域に根差した人的交流の場づくりにつながる行政と住民学習組織の協同について以下に述べていく。

4. 住民学習組織との協同

札幌市中央保健センターが2015年度に行った「両親教室」プログラムは次の通りである。

■実施日：年4回、6, 9, 12, 3月の各月1回、金曜日に開催

■実施時間：午後6時30分～8時30分

■定員：40組80人

■内容：・オリエンテーション

- ・講話「先輩パパからのメッセージ」
- ・育児実習（赤ちゃん人形を使った沐浴、着替え、抱っこ）
- ・妊娠疑似体験（妊婦ジャケット）
- ・アンケート記入

2015年度の札幌市中央保健センター「両親教室」は、その目的を「次世代を担う子どもの健全な成長発達に向け、初妊婦とその夫が親となる日に備え、親子関係・家族のあり方・育児技術について、夫婦で共に学び考える場の提供を図る。父親・母親の役割について共通の理解と認識をもつ機会とする。①子どもへの具体的な関わり方を学び、親となる意識の高揚を図る。②育児における家族の協力関係、相互理解について考える機会とする。③新しい家族を迎え、家族全員が健康で安全な生活を送るために、現在の生活習慣を振り返り、健康管理の心構えと禁煙・受動喫煙防止への配慮を啓発する機会とする。」としている。年に4回開催される「両親教室」は、毎回、募集直後に定員（40組80人）が埋まる人気講座となっている。プログラムの内、講話「先輩パパからのメッセ

ージ」のみ2015年度に新たに取り入れられた内容である。そして、この新たな取り組みが本稿で注目する協同と循環に関わる示唆を与えてくれる実践である。

講話が加えられた経緯は、次の通りである。2015年度以前は、育児実習のほかに映像資料をみて学ぶ時間が設けられていた。だが、古い映像資料だったため、使用限界を超えたという。その後、保健センターの最前線で妊婦やその夫らと向きあってきた職員から、映像資料を見ていた時間を使って、実際に育児を行っているお父さんのお話を聞く機会をつくってはどうかという声があがったという。中央保健センターでは父親による講話の目的を次のようにまとめている。「参加者は妊娠出産が初めてであるため、出産や育児へのイメージについても、漠然としたものであると考えられます。また、中央区の特徴として、核家族が多くサポートが少ないことから、母親一人で育児を抱え込む傾向が見られます。実際に育児を行っている「先輩パパ」からの体験談をお聞きする事で、参加された父親の皆さんに育児を身近に感じてもらい、育児参加の促進を図る事を目的としています」

その後、担当者は札幌を拠点に父親の学習組織として活動している「父親ネットワーク北海道」（以下、父親ネット）に協力を依頼。「父親ネット」から乳幼児の子育て真っ最中の父親を講師として派遣し、講話「先輩パパからのメッセージ」というプログラムを実施することとなった。

住民学習組織である「父親ネットワーク北海道」は、2011年に設立。筆者が事務局長を務めている。札幌や稚内、苫小牧、新得町などで父親の子育てグループ活動を行っている父親たちが情報交換と活動の励まし合いを目指して立ち上げた団体である。活動内容は、年に一度の全体交流会と各地域で行うお父さんの学習会の開催である。子育て経験のある先輩父親から若手の父親へ経験を語り継ぐ学習機会をつくっている。また、子どもから見た親の姿を語ってもらう機会をつくるなど世代間をつなぐ学習機会の創造にも挑戦している。こうした経験をホームページで発信しており、これらの活動が「両親教室」の講話へとつながった。

講話担当にはできるだけ出産前後の経験から間を置かない父親が話題提供者にふさわしいと考え人選を行った。実際に講話を行ったのは5人（Aさん、Bさん、Cさん、Dさん、Eさん）の父親たちである（表2）。いずれも子どもが0歳から1歳の父親に依頼した。職種に偏りがないように配慮し、できる限りパートナーも共働き、専業主婦どちらのケースも紹介できるようにした。まず、この父親たちが「父親ネット」にどのようにしてつながったのかについて説明する。「父親ネット」は設立5年目ではあるが、この間の継続的な学習活動により親同士のさまざまなつながりができている。

Aさんは、「父親ネット」のお父さん講座に参加した縁でつながった一人である。転勤族であるため子育て協力者が少なく、戸惑いながら夫婦で日々の子育てに取り組んでいた。子育てのヒントを得るため夫婦で講座に参加したという。講座をきっかけにAさんは「父親ネット」会員となり、子育て情報の交換などを行うこととなる。Aさんは1回目の講話後に転勤が決まり、2回目の講話を楽しんでいたものの札幌を去ることになった。だが、転勤族の多い中央区の地域事情に合った内容の話を提供することができた。Bさんも「父親ネット」のお父さん講座に参加した父親である。

乳幼児期の父親同士の学習交流会を企画実施したことでつながりをつくることになった。その後「父親ネット」の企画した思春期を見通した父親講座や子育てイベントにも参加を重ね交流を深めていった。育休中というタイミングもあり、3回にわたり講話をお願いすることになった。育休を取得する父親は少ないが、実際に取得している父親の経験談は少なからぬインパクトを与えたものと思われる。またBさんは、「一緒に講話を担当したお父さんたちの体験談がとても参考になった」と語り、自分自身の学びの場となったことを繰り返し評価している。

Cさんは、筆者と共に子育てネットワーク活動を行っている1歳児の母親のパートナーである。現在単身赴任中であるため、こうした環境の中、子育てをどう協力して行っていくかについて語られた。また、夫婦の子育て観、教育観の違いを調整し折り合いをつけていく方法についても語られた。Dさんは25歳と比較的若い世代の父親である。社会教育関連団体の職員で、筆者が講義を担当する大学の社会教育主事課程を受講する学生だった。父親ネットの活動にも関心を持っており、協力を依頼することができた。講話では勤務時間が変則的であるという事情から家事育児の分担やお互いへの気遣い、育児に比べ家事は緊急性がない点などを整理して考えることについてなどが語られた。

学習主体と教育主体の循環という点で特に注目したいのが父親Eさんである。Eさんは2015年度の「両親教室」第2回（9月開催）に参加した父親である。「両親教室」では、BさんとCさんの講話を聴いている。この回に「父親ネット」主催という形で「札幌市子育て支援総合センター」見学会の開催をよびかけた。「両親教室」は1回限りの学びの場であるため、出産後も継続的に子育て相談などができる支援の場へ妊娠期からつなげることや父親同士のつながりづくりを狙いに企画を考えた。この見学会に参加したのがEさん夫妻だった。こうして「父親ネット」事務局長である筆者と見学会で交流する機会を持つことになった。この時、Eさん夫妻は子育て支援センターや子育てサロンをまったく知らなかったという^{*}。子育て支援センターの職員の説明を受け、さまざまな支援があることに驚くと同時に「出産後はぜひ活用したい」と安堵の表情を浮かべていた。また、見学会の主催が行政ではなく、民間団体である「父親ネット」であることに若干の不安を感じていたとも述べている。やはり行政が主催する事業への信頼度は高い。こうした面からも行政と住民組織の協同の必要性が垣間見える。Eさんは「両親教室」を受講してから数か月後に第一子が生まれる。その経験を第4回（翌年3月開催）となる「両親教室」で講話担当としてEさんが語るという循環が成立した。中央区に暮らす父親Eさんが同じ区内に暮らす父親に向けて経験を語るという学習主体から教育主体への展開がこうして実現することとなった。

表2にある通り、父親たちによる講話の内容は、中央区における子育て家庭の特徴である核家族で親族のサポートが少ないという問題をはじめ、単身赴任、長時間労働、父親の育休取得についてなど現代的な課題にアプローチするものであった。他の区で行われている行政職員に限定した講話では、こうした地域特有の課題や地域の人的交流というねらいをもった学習を必ずしも十分に提供することができないだろう。

表2 2015年度 札幌市中央保健センター「両親教室」の講話を担当した父親一覧

開催日		職 業	講話の内容	講話担当者となる経緯
1回目 6/4	Aさん	会社員（転勤族、妻は専業主婦）	・転勤族で出産する経験～里帰り出産のメリット、デメリット ・夫婦それぞれの子どもとの関わり方の違いとそれに伴う衝突	「父親ネットワーク北海道」の父親講座参加をきっかけに入会
2回目 9/4	Bさん	公務員（育休中、妻は公務員）	・育休中である現在のタイムスケジュール ・子育てと家事を両立することの困難。子育て支援施設を活用している体験談	「父親ネットワーク北海道」の父親講座参加をきっかけに入会
	Cさん	教員（単身赴任中、妻は教員）	・単身赴任中の子育ての状況 ・子育てに関わる考え方の違い～テレビ視聴の時間制限、無農薬へのこだわりと無頓着	
3回目 12/4	Bさん	同上		
	Dさん	団体職員（妻は専業主婦）	・家事育児の分担と妻への配慮～勤務時間（不規則、長時間）との関連でお互いが無理のない範囲で家事を行うという意識づくりや手抜きのコツ	「父親ネットワーク北海道」役員と連携のある社会教育関連団体職員
4回目 3/4	Bさん	同上		
	Eさん	会社員（妻は専業主婦）	・妊婦として生活が制限されることへの配慮～飲酒を控えている妊婦の状況を鑑みず、SNS等で変わらぬ日常（懇親会の様子等）をアップすることの影響について	第2回「両親教室」受講者。「父親ネットワーク北海道」が企画した子育て支援センター見学会に夫婦で参加。

5. まとめ

札幌市内では先述の通り、10区の内3区の「両親教室（父親教室）」で育児経験のある父親の講話が行われている。この3区の内、2区は区の職員が経験を語る方法をとっている。行政と住民学習組織との協同によるプログラムづくりは中央保健センター独自のものであり、現場からの問題意識を形にした意欲的な取り組みだったといえる。

区で行う「両親教室」は、地域の人と人を結ぶことをねらいとして始まった父親たちの学びの場である。地域の人と人をつなぐという独自性は、地域の子育て力の低下が深刻化しているいまこそ求められるミッションであろう。しかし、近年は母子保健最前線の保健師は業務が大幅に変更され、効率化を求められている。「両親教室」という場で求められる学習内容をコーディネートする人員も十分に確保できない状況にあるといえるだろう[※]。地域で継続的に活動する住民学習組織との協同が区の「両親教室」のミッションを成立させるためのひとつの方策となるだろう。学ぶ側の父親たちは誰しも教育する側の父親に成り得る。この関係の理解が進めば父親の学びの循環はいつでもどこでも成立させることができる。

住民の学習組織である「父親ネット」の子育て講座に参加する父親は現状では決して多くはない。一方、学習実践における学習内容の蓄積や父親が学習主体から教育主体へと循環するための条件づくりには一定の力量がある。行政の学習実践は、情報発信力が高く信頼感もあるため参加者が多い。一方、学習の積み上げや地域の人的交流に関しては弱さを持っている。この両者が協同することで、地域における父親の学習主体と教育主体の循環、いわゆる父親から父親への世代間伝達という現代版地域の子育て力醸成が可能となるのではないだろうか。本実践によりその可能性の一端を示すことができたと考えている。

今後の課題になるが、本報告でみてきた協同・循環をつくるには、各区でどのような課題があり、そして、それに対応できる住民の学習組織があり、どのような形での協同が可能なのかをみていく必要があるだろう。今回事例として取り上げた中央区は転勤族の割合が市内で一番多く、親族のサポートを受けにくい特徴の地区である。このように区ごとに父親の子育て課題は異なるだろう。こうした課題に対応した「両親教室」の学習内容を検討し積み上げていくことが望まれる。

各区の両親教室は、それぞれの区で内容が考えられている。区独自の課題がある一方、全市的な共通課題もあるだろう。だが、各区の担当者が父親の学習内容について共有したり、共通の場で検討する機会はないという。あくまでも区ごと、さらにはその年度ごとに内容を考え実施しているという。加えて、「両親教室」担当者は、行政職員のため異動も多く、父親の学習について次年度につないでいくことや継続した取り組みを評価・検証しながら積み上げていくことは難しい環境となっている。実施した講座の資料も3～5年程度で廃棄処分され、経験を次へつないでいくことは容易ではないのが現状だという。こうした点も課題といえるだろう。

表3 「両親教室」アンケート（自由記述～講話に関係する部分のみ抜粋）

実施回	父親による講話への感想
1回目	・先輩パパからの話はとても参考になる内容でした。楽しいお話しでした。 ・妻への協力姿勢についてより一層意識しようとするきっかけになりました。
2回目	・2年後は講話をしている立場になりたいと思いました。 ・講話で生の声を聞いたのもよかった。・講話も参考になりました。 ・実体験を聞くことができてよかったです。 ・とても満足できる内容でした。父親になるという実感が沸く良い機会となりました。 ・父親の話聞いて大変良かった。 ・体験談は参考になりました。
3回目	・講話での話は現実の体験を聞くことができました。ありがとうございました。 ・先輩パパの話がとても参考になりました。 ・イメージが少しついてきた。
4回目	・あっという間の2時間だった。役に立つ知識が得られた。 ・生の体験談が聞けて勉強になった。夜遅い時間に開催していただき感謝いたします。

※今回取り上げた中央保健センター「両親教室」における父親の講話は単年度で終了となった。職員による事前打ち合わせの時間を確保することの難しさや予算確保が難しいことが理由のひとつとなっている。

最後に4回の開催でいずれも約90%の父親から回答が寄せられたアンケートを紹介する(年齢は30代を中心に20代から50代までと幅広い)。満足できる内容と答えた父親は、実施した4回を平均すると83.9%、ある程度満足できるは15.4%。少々期待外れは0.65%となっていた。またプログラムについて「今回の内容でいいと思う(講話、妊婦疑似体験、育児実習)」という質問に対しては、89%の父親がイエスと回答しており、プログラムの構成は高い評価となっていた。ちなみに「育児体験実習だけでよいと思う」にイエスと回答したのは平均で4.1%だった。数にすると1~2人程度である。父親による講話への感想は表3の通りである。感想には「2年後に講話をしている立場になりたいと思いました」という記述も見られた。こうした父親を見逃さず、地域の教育主体となる人材としてつながることが、協同・循環を生み出す一歩となるだろう。

-
- ⁱ 家庭教育支援の推進に関する検討委員会「つながりが創る豊かな家庭教育～親子が元気になる家庭教育支援を目指して～」文部科学省、2012年
 - ⁱⁱ 「第6期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」、中央教育審議会生涯学習分科会、2013年
 - ⁱⁱⁱ 「学びがつながるまち さっぽろを目指して～生涯学習社会を実現する学習機会提供のあり方～」、札幌市社会教育委員会、2015年
 - ^{iv} 札幌市健康づくり基本計画「健康さっぽろ21(第二次)」、札幌市、期間は平成26年度から平成35年度
 - ^v 斎藤嘉孝「父親・祖父母対象の公的プログラムのあり方についての検討—家庭教育支援事業における父親教室・祖父母教室—」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』10、2013年
 - ^{vi} 冬木春子「少子化対策における「父親支援策」—自治体による「父親教室」に着目して—」『静岡大学教育学部研究報告』第57号、2007年
 金山美和子「男性の育児を促進する子育て支援の検討(3)—企業における子育て講座の実践事例から—」『児童文化研究所所報』29、2007年
 金山美和子「父親支援の検討—父親の子育ての現状と支援ニーズに関する考察—」『長野短期大学紀要』第62号、2008年 など
 - ^{vii} 吉岡亜希子「子育て講座における父親の学習過程と意識変容—さっぽろ子育てネットワークの取り組みを事例に—」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第107号、2009年
 - ^{viii} 吉岡亜希子「父親の主体形成—稚内市における地域子育て協同実践を事例として—」『日本社会教育学会紀要』47、2011年
 - ^{ix} 吉野裕太「「親力」つむぎ事業 in 恵庭」『日本の社会教育実践2015』第55回社会教育研究全国集会資料集、社会教育推進全国協議会、2015年
 - ^x 子育て支援センターや子育てサロンが地域に開設され、その数を増やしているが、「両親教室」に来ている親の多く身近な子育て資源として意識していないことがうかがえる。実際、ある回の「両親教室」に参加している親に支援センターや子育て拠点、子育てサロンを知っているか尋ねたところほぼゼロであった。そのため「両親教室」で子育て支援に関わる施設スタッフを招いて、内容を紹介するプログラムを提案したが、特定の支援施設だけを紹介することは難しいという回答で実現には至らなかった。本文にある通り実践的課題として行政や地域住民が行う学習活動を父親の学びとして“ひと続き”に捉える視点の弱さをあげた。この点からみれば、母子保健の領域の「両親教室」と児童福祉の領域となる子育て支援の場の学びを親の側の課題に即して有機的につなぐ努力が求められよう。
 - ^{xi} 前田典子「保健と福祉の統合段階における保健師実践の変容—札幌市の事例から—」、『社会教育研究』第23号、北海道大学大学院教育学研究科社会教育研究室、2005年